

[名古屋大学教育発達科学研究科 2011 年度修士論文抄録]

留学生の就職活動における諸能力と意識の実態 —就職採用における筆記試験に関するヒヤリング調査に即して—

張 辰 華

< 修論要約 >

2010 年、日本を世界により開かれた国とし、アジア、世界の間のヒト・モノ・カネ、情報の流れを拡大する「グローバル戦略」を展開する一環として、2020 年を目途に 30 万人の留学生の受入れを目指す「留学生 30 万人計画」の骨子が発表された。

太田 (2007) によると、卒業後、日本での就職を希望する留學生は年々増加している。日本は国をあげて留學生を日系企業に就職させようという動きを見せているにもかかわらず、白木 (2007) も指摘しているように、留學生が日本で就職する割合は非常に低い。文部科学省の調査によると、留學生の約 6 割が卒業後は日本での就職希望を出しているのに対し、実際の就職率は約 3 割に留まっている。

日本に留学している外国人留學生が日本で就職しようとする場合、行わなければならない就職活動は日本人学生の就職活動と全く同じである場合が多い。本研究は、留學生の日本での就職活動において、特に採用選考に際して筆記試験をめぐる現状を分析することにより、留學生が問われる諸能力と意識の実態を解明し、筆記試験の結果がどのような要因により左右されるかを分析し、更に、筆記試験対策のための支援、就職活動のための日本語教育について、留學生のキャリア教育・就職支援の立場から検討したいと考えた。

本研究では、半構造化インタビューの方法を用いる。インタビューの場面で参加者の許可の下でインタビュー内容を IC レコーダーに録音し、録音内容を書き起こして分析する。研究の実施は、張辰華 (個人) が行った。ヒヤリング調査は、名古屋大学の中国人留學生 (主に大学院修士課程 2 年生、学部 4 年生) の内、日本での就職活動を行っていた者を対象とした。

以下に調査結果の概要を示す。

まず、筆記試験の通過率について、通過率が 0 ~ 20 % であるのは 2 名、20 ~ 50 % は 4 名、50 ~ 70 % は 3 名、70 % 以上は 3 名という結果になった。この研究で「通過率」とは、一人が受けた会社数に対し、筆記試験の段階で合格し、次の選考に進んだ会社数の比率をいう。

次に、就職試験の際に問題となる諸能力について分析した。

言語問題では、留學生は日本人学生と同様に、語彙、読解などの日本語能力が測定される。調査協力者 12 名の内、11 名が困難であると言及した。最も困難であると回答したものには、語彙の不足、制限時間の中で読解問題の解答がやりきれないなどがあげられた。

非言語問題では、主に数学や論理性を測定する問題が出される。調査協力者 12 名の内、「困難である」、「得意である」、「どちらでもない」と答えた人数はそれぞれ 4 名であった。理系だからといって数学が必ずしも得意であるとは限らないことが分かる。文系の学生より理系の学生のほうがやや解答しやすい傾向が見られた。

適性検査では、性格を測定する選択式問題が大量に出される。留學生は概ね自分の本当の性格に基づいて適性検査を受けたことが分かった。その理由としては、制限時間が設けられ、深く考える余裕もないので、正直に答えたほうが早い、と考えられる。この適性検査では留學生ならではの問題点もあげられた。日本語がわからないということが原因で問題の意味がよくわからず、回答するスピード

や結果に直接に影響を与えてしまう場合も十分考えられる。ある程度、日本語能力が問われる試験でもあるといえよう。

英語問題は、企業又は筆記試験の種類により出題される場合とそうではない場合がある。中国人留学生の中でも民族により英語能力にかなり差が出るのが分かる。漢民族の学生の場合、大学レベルの英語能力は持っていると言える。少数民族の留学生はほとんど英語教育を受けたことがなく、筆記試験の英語問題は少数民族の留学生にはかなり不利があることがわかる。

筆記試験に対する意識・態度については、「肯定的に思う」と「否定的に思う」という正反対の意見が出された。「筆記試験が大事で、重視する必要がある」と回答したものが6名、「筆記試験はあまり意味がない」と回答したものが4名である。「留学生向けの筆記試験があってほしい」と回答したものは2名である。

中国人留学生の筆記試験の結果に影響する要因について、主に以下の4つがあげられると考える。日本語能力、出身校ランクと専攻分野、来日目的と進路決断、筆記試験に対する意識・態度である。ヒヤリング調査の結果を分析したところ、以下のような結果が分かった。

筆記試験で問われる留学生の諸能力及び筆記試験に対する意識の実態について、第1に言語問題では、日本語学習歴にかかわらず、留学生にとって普遍的に困難であることが分かる。第2に、非言語問題では、文系より理系の学生のほうが少しやりやすい傾向が見られる。第3に、適性検査では、正直に回答したものが多く、日本語による出題内容が分からないという原因で、回答するスピードや結果に直接に影響を与えることも存在する。第4に、英語問題では、少数民族の留学生にはかなり不利があると考えられる。第5に、筆記試験に対する意識・態度には、肯定的な考え方と否定的な考え方が両方現れた。更に、留学生向けの筆記試験があってほしいという意見も見られた。

筆記試験の通過率に影響する要因について、第1に、筆記試験の通過率が日本語能力に大きく左右される傾向にあるとは見られなかった。出身校ランクが上位にあるほど、筆記試験の通過率が上がるという傾向が見られるが、例外もあった。更に、全体的に、文系より理系の通過率が高い傾向にあった。第2に進路決断に関しては、最初から最後まで一筋で就職を希望する人は、途中で考え方をえたりした人より筆記試験の通過率が高かった傾向が見られる。第3に、筆記試験に対する意識・態度と準備の熱心さとの関係では、積極的に準備していた人は皆筆記試験に対して肯定的な態度を持っていることが分かった。普通に準備していた人と全く準備していなかった人の中では、肯定的な考え方や否定的な考え方の両方が見られた。積極的に準備する人ほど筆記試験の通過率が高い傾向にあると見られた。更に、全く準備していなかった人の理由として、客観的に時間の余裕がなかったのと、主観的に重視していなかったのをあげられた。個人の努力が筆記試験を受けた結果にかなり影響していると考えられる。

本研究では、中国人留学生12名を対象に筆記試験に関するヒヤリング調査を行い、留学生の就職活動に関していくつかの共通する問題点を明らかにできた。しかしながら調査参加者数が少ない範囲での分析であり、限界性もあると考えられる。今後の課題として、もっと広い範囲で多くの留学生に調査を行い、豊富なデータに基づいてより客観的な分析を行うべきと考える。

<参考文献>

- 中村純子 (2008) 留学生の就職意識とキャリア形成支援 地域総合研究 8, pp67-81.
 池田伸子 (2009) 留学生の就職を支援するための実践的日本語教育について *Language, culture, and communication :Journal of the College of Intercultural Communication 1*, pp.131-142.
 古本裕子 (2010) 日本企業への就職を目指す留学生の直面する問題について—模擬試験問題から推測する筆記試験 SPI の難しさ *Journal of Nagoya Gakuin University. Language and culture 22(1) 2*, pp.83-96.